南總里見八犬傳 第九輯 巻五上

特
曾イ
600
277

再校

八犬傳九輯

冊五卷之

三十二
十一月十七日校了

南總里見八犬傳第九輯巻之五十五

東都　曲亭主人編次

第百五十九回　助友忠諫父の志ふ代る　信隆機変族の兵を借る

却説雑兵狙岡猿八々。當晩洲崎の陣ふかう来て。軍師犬阪毛野ふ報るふ。那浦ゆく有一の海られる猿樂をゆく。扇谷の間諜児天品餅九郎と釣出ふ。其奴鈍くも謀られく。友勝ものの汲引をせんとそ。同船ふらら無りそ。五十子の城と投て。漕走らせける光景をゆと具へければ。毛野ハ憶ざるち笑まく。現狐と釣る禍夫ふ似る我筆計の折もよく行れて。反く浦安ものの邦助ふるりハ実ふ物怪の幸ふるりける。事皆汝ら挿紀ん必秘ちべー秘ちべー。と口を鉗めく。人ふ知らせそ。卒とそ賞銭を取れば。猿八々狡び受く。已が守屋へ退りけり。あの時尚甲夜ゆらまく人

600
277

定に至るねば。毛野の本陣に赴く。義成主に見参す。折〻義成主は獨帳中
る。燈燭の下に。兵書を閲して在るを。躯〻ロ入れて對面あり。當下毛野の今
宵貞住に沼逞兵百五十名を從せ。大角が両個の使と共に那地へ遣りける支の
趣。又東峰崩二と。韓船貝六も。亦百五六十の隊兵を授けく。其授る方へ
遣るを。又音音曳と。妙真單節とを前後の別船ゝに乗せ。二度に五
十子へ遣を折。妙真ぞ。浦安牛助友勝を附く。帮助にあける。又雑兵狙
岡猿八が。猿樂をとりく。扇谷の間諜児天品餅九郎を。釣出ける支の便宜を。
悄地に告禀ける。言果て又ら安ら。立日音ら四個の婦女子を。前後二度に遣る。
恁々の遠慮にられ。ゝれども。那朝時拔太郎の事もいへば。大石憲重ら。猶疑
ひて。千代丸豊俊の降参を。信ざるこもあれ。彼心許るくいへば。烏夜の投石に似
れども。更に猿八が猿樂をとりく。聊試ひに思ふ。増る便宜ゝ。既に安心

仕り。とへば義成主ら矢て。然る猿樂の計策は出来過ぎり。とる者もあら
んを。我思ふ。ゝ能狐を捕る猶夫ら。ゝに必野狐のゝりと思ひ定めね
ども。餌をとりく。弥を撒て待て。狐必寓来る。其弥に入る。汝が今宵凡
筭計も。則又ゝ理ゝ。那敵の間諜児ら。必其浦邊に在んと。正可に思ひ
ゝれども。謀る所暗合して。毫も錯ざりける。凡智のよく做を所ゝ。曩
ゝもいへる。媒鳥をとりく。秋小禽を捉る者と。則是同一理ん。既に敵の間
諜児が。汲引を為る。妙真單節友勝ゝ。ゝ音音曳とも是に。ゝて必
や信容られん。嗚乎謀る哉と稱へ。毛野に畏ゝ。額働て。臣ら智術の
所以に。這回の拙策始る。其圖に當りゝ。則館の御盛德。天の祐
ゝ。機変ゝ実に已を。ゝざる所ゝ。とゝを義成主ゝ。然る
いひそ。機変の巧ゝ。聖賢の。必婦ゝ所ゝ。れども。孫子に兵を詭道とる。ゝの故に

孔聖の事に臨く必怕れ謀を好て成さん者へとかりそめあるべき。然ば機変は巧るも善に與して紛へば必や饒されん。邪智の機変は必害あり。豈一列に論せんや。又かりそめ既に敵の寄せると雪えて八日あり遠くも今大寒の晌るに。水戰を上日とせる敵の浅慮にいかゆも足らねど。自家の士卒徒に海に落ぬ者あらば立地に凍死んなれども脚冷亀して干戈を操るに不便多べし。その戈を隊思る弥と問れて毛野い答て云やう。然いに寒天の水戰は自他の不便に似たれども。年来知せあるべき當國は冬暖なる氣候遠ざかれば曩に水軍を調煉仕りひしに既に初冬の時候なるに這頭の海水温なれば馬に乗りて海を渉に馬脚冷むと凍むをもりく血氣壮なる士卒ゆく泅ぎもれば今は大寒の時とへども水は反て温し況八百八人の拙策紛れなく海水も言ふまでもく湯に做るべし。この戈を義成主理あると応て。餘談に

冬の夜深ふけ。話分両頭。その日十二月五日五十子の城内に今朝早天に赤品百中ぶ。皆節と艦幟を賜りて貌姑峯路へ後定正顕定相計ひて則水陸の隊配あり這里も亦間諜児の往進に据て敵の備を守くに總大将里見義成に安房の洲崎に本陣を構て則その在り軍師犬阪毛野胤智防御使犬山道節忠與に相従て是を守る。其隊の軍兵一萬二三千なるべし。又陸に下總る。國府臺と根城にて義成の嫡子里見冠者義通總大将なり。老當東六郎辰相兵頭杉倉武者助直元に是を守る。又其城外なる矢砺河を前にして防御使犬塚信乃戌孝犬飼現八信道に是を守る。内外の軍兵一萬に足らず。又行徳口に防御使犬川荘八義任犬田小文吾悌順大将なり。矢砺の下流行徳の入江河邊に陣をる。其隊の軍兵七八千に過ぎず。その他安房上總なる四十八箇城に故の如く城主頭人是を守りて海邊の備を固め

らを稲村の城に義成の三男里見次九老黨荒川兵庫助清澄ら三千八
士卒と倶にこれを守り。瀧田の城に義成の父里見治部大輔義実に致仕ス老
黨杉倉木曽介氏元堀内藏人貞行ら相従ふ。くに是を守る。龍城の士
卒。僅に一二千ばかりと云。是ゆゑに洲崎へ向ふ水戰の揔大將に管領扇谷
修理大夫定正。並に定正の長男式部少輔朝寧。小幡木工頭東良。大石
源左衛門尉憲儀。武田左京亮信隆。是ら宗徒の大將として。その隊の軍兵
三萬餘名。巨艦數百艘。ゆゑに無く。本月八日の曉天より。徑に洲崎へ推寄
せんとす。又下總の國府臺へは。管領山内兵部大輔顕定。足利左兵衛督
成氏。両大將。顕定の嫡子。上杉五郎憲房。並に白石城介重勝。成氏の家
臣横堀史在村。新織帆大夫素行。是に従ふ。両隊の軍兵三萬八千。又行
徳へは。定正の嫡子。上杉五郎九朝良。千葉介自胤。両大將。

守。憲重。原播磨介胤久。相馬郡領將常稲戸津衛由元。是に従ふ。両隊の
軍兵二萬餘。漸々に走附く。士卒と合して。水陸の兵。凡そ八九萬に及ぶ。
俄りて十五萬騎と稱ス。既にして諸方の隊配。かの如くに定りぬ。その朝。顕
定父子。成氏。朝良。自胤。柴濱より艦に。或は両國河に泝り。或は徑に中川へ
推渡して。夙く要害を含んとす。士卒の艦に餘る。歩卒。くも多くして。幷
び中に成氏は初大石憲儀。約束に言違ひて。定正。顕定の管待恭しくも。況
今。番の揔大將。ゆゑもなくして。獨憤胸に満て。側の人の。折々。佯の老
黨横堀在村に。あの。弐什麼と。怨せる。他の諫の齟齬ひく事のあるに及ぶ。然
ども在村恥る色なく。悄地に主を寛解るやう。御憤は然ることなり。臣ら事に
勢ひ。ふりて。那肚裏を推量るに。定正も。顕定も。底意あり。我君を。推尊ずるに
あらねども。近國の諸將来會ぬれば。其兵權を失はんと。胡意恭敬の礼況

て盡さぞ遊莫圀府臺の寄隊ゑ。他既ゑ我君と。總大將ゑ做ーまゐせ。顕定い
副將るべ。且水路い安房へ近けれども。那里僅ゑ四郡の。上總い安房ゑ五六
倍て。四十餘城ある魚米の地。然ば下總ゑ攻入りて。早く上總と畧せゆゑ。其
軍功。定正主の水戰ゑ十倍て。兵權立地ゑ我君の御掌ゑ入らんゑ。何の御疑ひ
いべ。大功へ細謹を少有ぞ。大礼い小讓を弊せ。小礼を忍されば大謀と乱るい
ゑ。今一乘寺時忍せゆ臣ゑ恁而いへば。宜く計ひひてんゑ。任させゆひと。説惑
せる便佞利口ゑ成氏淺くも憤り解く。又阿容々と。顕定父子と俱ゑ圀府
臺と投て進發ゑ。後悔あるゑ立ざるべ。有恁り一程ゑ。扇谷の内管領持資
入道道灌い其子薪六郎助友を名代ゆて。その日五十子の城ゑ着到あける。助友
隊兵三百餘名。昨日相模る。糟谷の館を立出く。後ゆ今日ゑ逮べども。敢
遲參を恥る色る。推く定正主ゑ見參して。父の意見を舒くゆ。曩ゑい

愚父道灌屢諫書を呈りく。里見を御征伐の。不可るゑを稟あーゑ。御用
ひあらぎーて。既ゑあの期ゑ及せゆ。今けゑ是非の彷るべ所ゑあらば。あれども人の
臣とあて。其君の非を知りるゑ。猶も孤忠の詞を盡さぞ。共ゑ傾覆を俟ゑゑ。不
義ゑて且愚るべ。抑那義成父子い世ゑ稀るべ良將ゆ。當家と怨を結
びるゑ。矧又其良佐る者ゑ。仁義八幡の八犬士あり。東荒川杉倉堀内の
毎も皆一人當千ゆく。其封疆を守るゑ足れり。然るを今烏合の衆とも。
一時ゑ水陸より攻ゆて。克まく思ーゆ。卵を以て石を厭ー。火を夾て水ゑ
擲ゆ。甲非文ゑ技ゑいべ。臣ゑゲ愚意ゑく是を思ゑ里見い腹心の患ゑ
あらぎ。後の患ひゑるべ。則是顕定主と北條長氏ゑを。友て顕定主ゑを
束ね詞を卑くあく。俱ゑ里見を伐ゆい。只前面を防く。背を忘て。御不覺ゑ
あらざるゑ。倘幸ひゑて今番の戰ひゑ克せゆ者るゑ。兵權反て顕定主ゑ奪

るゝことあるべきぞや。又戰ひ利あらざるは是より怨を里見氏に結びゆのこるべきぞ。御方の諸將離れ叛くに地を削らるゝに至る時悔く及ぶべくもいらぎ而るをいかんや凶さえや。今大寒の時候なるに水戰を上目とーゆる。士卒の足脚亀らく。悴紀自由なるべくもぞ。且昔いゆゝえ近世も安房上總を攻伐とく。艦のり渡せー例を学ぶに水行い其路捷けれども海岸に嶮ヨヌくて波濤暴けれい艦寄らぎ故に極て危し。敵い海邊に成長るそ。水戲水馬自由なるに不知安内なる士卒を馳く。這寒天に水戰い時も敵をも知ーコ召れぬ謀の軍とのいまくのを顕定主いの理を知まる欲君と倶に水路に向ぎ。其隊配の折に泣く。反く幽府壹堂の敵に向ひのひーい是其奸智に長る所。姑且成敗を見んとそるを悟りぬ。そ朽惜けれと席を拍ち面を犯して親に代まる孤忠の誠意諫言細やかるりけるを定正いゆも沿果ぎ怒れる面に朱を沃ぐ眼を睜り聲苛立く。

やをれ助友過言之親道灌ぐ分付へりとも一言一句の對酌もるく敵と美く。自家を訕る开と忠臣とふべたや里見い近曽我に殺せー大山道節犬塚信乃等を引入れく。隣國に毒を流せる罪重なを今伐ま後世子孫の患ひとるさえ且顕定い同宗へり迷に不合の胸解けを今我都助に疑ひを栖誰と憑ん況や今寒天をそ。其利を無て水路をやるぞい就の日に那根本る稲村の城を援ん里見の士卒るれいとそ。水族にあらもあらず寒夫の水戰に自家の足脚冷亀らぶ敵の足脚も同ぶかるべーそを左まれ右もあれ我に神仙の幇助あり又術師の御道あり必勝べた理によれる今征伐の時に方りて。不吉の詞を盡せろ饒されくた大不敬其罪重なを知ざる狭道灌糟谷に在りるが。我催促を学閑ゆて。今ゆ登くに耳をりく名代に聊る。士卒を不忠るに外聞なた過言の條々今いまも饒ーかゝり覚期を

さぐまのすけ
のぶとも

さぐまのすけのぶとも
助友を斬らんとす
さぐまのすけ
助友

せよ。と罵れども。助友阿容る気色なく。御諚でいへども。昔も今も良将は幻術責ての果敢るを技と。憑むとやいふ。耳を貴と目を賤とて。奇巧を好めば。必奇禍あり。其も亦是御衍の一ホそいべけれ。臣ぞ遅参を咎めず。只今参るも。尚早う。親道灌が教ホうて。敗軍の折御危窮を拯ひまつらん為ホてそといふ。なも果ず定正い敦圉に猛く御と身を起し。くいまれぐそ君臣上下の礼を乱る。烏滸の白物。命根断くれんぞと罵りるぐ。佩刀の柄ホるを掛く引抜んとまけるを。その席ホ佐りる武田信隆驚く。吐嗟とだち。身を肩ホ推隔々刃を抜ぜ。助友が與ホ陪話てゆ。在下ら。信冒の名代ふる。遅参の罪あり。然ると他人の為ホも過言の罪を勧解禀まい。打歩の杭ホ似れども。今助友が禀を一美ハ。則親の口状を。憶ぞ嫌忌ホ渉りい年尚少に野以れば。いるぐ恩免を賜へか。縦其罪是ありとも。

他が親持資入道の。年来軍功ヨヌるいハ世の人も知る所なホ。一個の敵をども伐ゆるぐ反て有功の冢臣の其子を誅しゆひるべ。必敵ホ笑るべし。這義を思ひ召さぞや。と為ホ諷諫の詞を盡を程ホ左右ホ侍りし大石憲儀及箕田駅蘭二も已にを以ぞ詞を添る。共侶ホ寛解しるべ。定正愽ホ怒を盛めく。故の発児ホ椹る時憲儀聲を励り立る。新六郎罷り立ね。ゑよ退ぞと遣り立る。助友ハ応もせぞ。艶然と見るて。微子ハ去り。箕子ハ是が奴と做り。比干ハ諫めく則死せり。我大皇囲ホ越後中太。あり。寧ト忠臣の狗とるホとも。乱離の人ホるべや。後ホぞ思ひ合されん。と呟に。るぐる身を起して。徐ホ外面へ退ると。やぐく。隊兵三百名を従へく。糟谷の館へ返りし。欲或ハ淹りて中途ホ在る。欲是を知る者るりけり。然ばその日定正の怒を寛解く。助友を。恙もるく退りせし。武田左京亮信隆ハ素是上総る。廳南の城主ハ初信隆衍く。那

墓田素藤と酒茶遨遊の友垣を締びゝ去歳の比より春に至りて素藤が里見を怨るゝありて叛逆を竟ふ館山に悖逆の旗を建て時信隆も亦交遊の罪免れゝと思ひ〻に其友なる真里谷信昭千代丸豊俊等と共に各其城に据ゑ討隊の大将堀内貞紀杉倉直元堀内貞住等と戰ふ程に真里谷信昭が心変りして寄隊に内応をしければ其戰忽地敗北す豊俊は生拘られ信隆は辛く命を免れて駄る漏される士卒と倶に水路へ歴て相模路へ落延び甲斐の国主武田信昌に嬬家なれば悄地に府の城に赴く則信昌に其身の不幸波落の由を告げ托つ憑む主僕寓居あらけるに其の年の冬十一月扇谷山内の両管領が安房の里見を征伐せんとて甲斐の武田も加勢の軍兵を催促せる然ども信昌は北條長氏の壓されぬみゞゝに出陣せべゝ親族の中にも為べき者を軍代として早く五十子の城へ来會せしべしとありしかど信昌は生応して敢其義を急ぐ老黨甘利竜元等を召集へゝ其義誰何と詮議ありしに竜元が申す那里見義実義成父子は當今稀なる良将なれと云世の風聲に恐るゝは狡猾又偏昨歳當国に旅宿して料亭館に見参をける犬塚信乃犬山道節は智勇兼備の俊傑なる君の知召所なれ今は其黨都て八人皆里見に相仕へゝ重用大なるぞと云ふも風聲に紛れは是虚然べき是虎に翼を添る如く勍敵に成管領島合の衆をも伐滅さんく欲するとも〻ゝて克ふもんや當家は猶幸ひに北條を厭ふの一役あり加勢の士卒を遣さば權且其成敗を御覧あかれと云意見憚る所なりしを武田信隆答へて制めゝ信昌に向ひて甘利が一説その理あれども加勢の軍兵を遣されぎい両管領必怨む今在下に隊兵三百名を借しめば則館の名代と唱へ五十子の城に到らば徒而

那里ふ到るとへども。両管領を相輔けぎ。又里見ふも従へぐ。在下一箇の挿
ぎをりく。輒く廳南の城を今復して。故のごとふ是を領せんいくぐ古の義を饒
さまのと其々請求るを。信昌宥々許りく。和殿我名代として。五十子の城ふ
造りて。反く両管領を相輔けぎ。又里見ふも従へで。舊の城邑廳南を。今
んとへるいまろ。言詳ふ示しねと問べ信隆然ンふ。計い密るを可とも。
機ふ臨む変ふ応る。進退い肚裏ふ在りまのの。倘果さぎしく。出御身ふ及ぶ
べい在下みづから。刎く。开を齎して。謝しまろうん時いるくて。喪ひ易りい
くぐ饒さまのと。天地ふ拠言して。請ひくぐ信昌猶も思難て。又充元ふ意
見を問ふ充元一霎時沈吟して。その人曩ふ友を擇まで。竟ふ城地を喪
ひて。浮浪一稔ふ及べども。其本性い胸逞しくて且義あり。智術あり。謀る所悪
事多くぎ。饒しのふ多ふ。當家ふ稟し恩を仇る。館の御為ろ。

不義ゆべ。自業自得之。倘幸ひゆく其事成らば。這里ふ然せる帮助を做さ。
親族故郷へ錦を壯衣ふ還城樂の欲びゆくん。先事の試ふ二三百の軍兵を授
けく五十子へ遣しのぐ。一事両用ゆべ。狡とふを信昌うちぢて。我も亦如右思
ふのと。卒然び其望ふ任せん。左京よ。信隆只ちく謹慎を旨として。疎忽の舉
動ちべくぐと。叮寧ふ敬言く。逞兵三百名を授けしぐ。信隆忻然と欣び美く。
恩を拜し別を告く。上總ちく今ちでも所従の士卒十四五名と倶ふ件の兵を
ねく。夙く甲斐の府を立去るのちく。胡意中途ふ淹留して。十二月五日の朝。五十
子の城ゆる諸將の行德國府臺へ出陣ちける。其迹へ入替りく。定正ふ見参ち
遲着の障りを云云と。頼陣ぐいられば。定正反く其遲れを怒めぎ。肚裏ふ
思ふやう。武田信昌い既ふ是西を厭ちの一役あれば。加勢い餘計の軍役。且這信
隆い素是上總る。廳南の城王りしふ里見義成ふ肩を御しちく果敢

る城を攻落されく。甲斐の武田ゐ身を寓くうと人の噂ゐ豫ぞ有徒ぶべ
安房上總いたの人如法寒内ゆく。且義成ゐ怨あれば。敵ゐ莊く自家ゐ帰
助ゐること必ヨヌくうんと尋思をあつくそぶ侭ゐ姑且身邊ゐ侍らせて。安房上
總の地理虚実城邑のヨヌ寡剛柔を甲ひとるく問攷くいと憑心く思ひくべ。
今助友ゐ父ゐ代まる孤忠の諫言忌とるく凛然として烈しかりければ定正怒ゐ
堪ぎーてゐ敷るゐせんとそ敦圉ぎーを。信隆為ゐ勸解けるゐ言听れ事ゐれて。早
く異ゐ理りい件の意味あれば現乱世といひぐ笑の中ゐ刃ゐ。飯の内ゐ鍼
るゐ信隆ゐ胸の機関善惡邪正孰ぞや。鬼神もいまぐ量らざるべ。

第百六十回

衛士相桃む兩枝の花
名將許容る内應の質

小程ゐ定正ゐ五十子の城近ぎ濱邊ゐヨヌく戰艦を集るゐ大石憲儀奉
ア〜く。其艦と展檢ぎ。約莫柴濱より。大森六郷まで。海岸ゐ維ぐ大小の戰
艦千百數十艘。這内中鯨舫幾十艘ゐ柴焔硝の類都て燃草をヨヌく
採入るくゐ憲儀の家臣仁田山晋六武佐是を嘗りく。夫役を駈て柴を運
ぶ。名ゐ負ふゐの地方ゐ素より是柴ゐ富ぎ。其故ゐ當時柴の浦人ハ冬く十
月の初より。其年の暮まで。海苔を採く生活とを。其海苔を採るゐ波濤
至処より。十數間水中ゐヨヌく柴を建く。篠離笆の像くゐ倣ー措けば。波瀾ゐ
搖るく海苔。日日ゐ這柴ゐ攫るを。採く漉ぎ且乾て賣るを。地方の名産と
ぎ。氣味極く好。他郷の海苔のく及ぶ所ゐあらぎ。這海苔を採る柴を。土
俗の方言ゐ名つけてひびとゐ。近曾ある人の狂歌ゐ越谷寺山ひくゐひぐゐる海苔と
ある玉のとー賜ゐせんひぐの乾海苔。作者按まるゐ。ひぐとゐ日日の義ぞ。洋中の
海苔建る柴ゐより來く。日日ゐ攫れば。躰て其柴を呼く日日とゐ狹地名を

柴とふも這柴に據りてなるべし。廻國雜記に道興准后の柴浦をよみぬる歌に船よするつむ柴のうら人とあれバ即今の芝のことなり。本名ハ更級日記に所云建柴の浦即是也其柴を建るの故なる證となすべし。或ハ又太田道灌の平安紀行に芝浦そよめる歌に露分けし道の芝生を踏しめし駒になまなるわけされの空とあれバ昔も柴に芝を通して書る假字なれバ論なし昔の柴ハ海邊の真砂子地ならんに結縷草（俗に芝と書るハ是也）のよく生ふべくもあらず柴を芝にかけて詠るハ歌人の比與のミ必としもべからず又按するに柴に程遠からぬ地名に日比谷と喚做もあり昔ハ這頭より日日の柴を專伐出しによりて日日谷とよぶ歟猶考て正しき照驗をうれバ別に識すべし。そハ昔柴に柴の多かりしよしを解くのミ閒話休題有係し程に十二月六日の曉天に音音ハて身ハ順風に吹送られける船柴濱に果しかバ目今艦に柴を採入る。丈役

毎を喚てふやう。奴等ハ悄地に安房より來ぬる者也管領樣の御内さへあるとのたまふ刀袮們に對面を願ひ候なりと。いのより稟しゝとへバ大家驚きて且訝りく。安房歟々々とてそろに走りて仁田山晋六に告れバ晋六も亦驚きかなく。先其船を檥歇させて艣械を奪ふて。許多の艦の間へ緊しく維せて。隊兵を招て船將ひに近つき來て兩個の婦人を相るに一個ハ年六十有餘也く。骨相賤しからぬ媼也又一個ハ年二十五六にやあるらむ。顏容の愛らしきに惜むべし髮婦なる歟頭髻を剪て兩鬢に捨られ是より外に同船の人なけれバ晋六僅に心落ちゐて。音音に向ひてふやう。媼等ハ是安房人歟儕ら折に悍らもなく何どて敵地より來にけるぞ。儕ら我ハ扇谷殿の麾下の一諸侯當國大塚の城主なる大石石見守憲重。主の家臣也く。郎君源左衞門尉憲儀主に隷られたる仁田山晋六武佐是也。憶ふに若們ハ吹流されし歟なくバ。這頭が故御で

還りて欲と問ふと音音いふあるぞ否我們い然る者るぞ故主の與ふ内応の密使ゐ参りあれ其故い箇様々々と千代丸豊後あ事の顛末且開戰ゑ時ゐ臨く裏伐て里見あ艦を焼き欲る進退を実ゑ彼ふ其況告げ其言果て又ゐ千代丸の残黨の世を潛ひく安房ゐ在ゐ者百十數名ゐれども女子ゑ子ゑ漁舟ゐ遠く出ゑを饒されねば已とを知ぞ我們が大事の使ゐ立ゐ良人も児子も赤の春の開戰ゐ陣殁あれい嫗共侶ゐ孀婦ゐ伝ゐ數ゑれども我名を槌引嫗い臥間と喚做ゑゐ故ゑ名の主君ゐ禀上ゐ事と憑ゐ曳ゐも共侶ゐ其漏るを補ゑ本末乱さぞ哄誘せゐ晋六ゑ点頭て原来和女ゑ隊聞く上總の敗將千代丸氏の残黨ゐ在ける欲ゐ事ゐ差錯るゐ那人當家へ内応の謀書と必疑ゑゑん。とゐ出ゑねとゐぞ音音い差る面色て御尚ゐ事の慌ゑて開いとゐ亡れゐ非如其書ゐ浮るとゐ伝ゑかとゐを晋六ゑ事ゐ默れ騙児奴舌長ゑ縦使ゐ女流でも忘て東西ゐ事を鉄て降人裏伐の願書とゐ示ぞと云愍児あんや必是若们い里見の間者ゐ疑ひる。結杠れ兵毎饒ゑと訛聲高く嗅れい捷雄の殺兵五六名羅りぬと応も果ぞ船ゐ入りと兼移る。音音曳ゐ云云と爭ふ分説を听ゐて七十ゐ三四撻喫て。索を撫んと闘く折る前面ゑ来ゐ快船一艘漕の真風莚帆揚る疾と宛箭の如く陡然とて近つく程ゐ其船ゐ男女四名ゐ過ぞ舳頭ゐ在りける一個の漢子い是則別人ゑぞ。伝田山晋六ゑゐ火家ゑく。いゐる比間諜の為ゐ安房へ遣られて那地ゐ在りける天品餅九郎ぞ在りける登時餅九郎聲慌く。扨ゑ人人ゑる下ゑぞねくと制れい晋六ゑ。ゑる什麽と訝りるぐゑ夥兵を制ぞ。ゑゑ程ゑる件の船い径ゐ突然哩と共中りて

○文溪堂藏

早く水際に寄りしべ。餅九郎が磯に陟りく。其頭に立てる晋六が耳を掖よせく悄説ろ。又友勝と妙真單節とを指して事の由を告る程に既ゆて天は明けり。浩處に大石源左衛門尉憲儀が聚合し戰艦を展檢せしとく。五六十個の士卒を領く。騎馬苛めく。五十子の城より出て来ふれば。仁田山晋六天品餅九郎が遽しく是を迎へく。訟禀もべを呉ありとふを憲儀うちゆて馬より下て発児に撫り出。當下晋六ろ。千代丸豊俊が降参を請ふ前使の事を告れば。餅九郎も亦豊俊が再度の使濱縣馬助が母と女弟を推乃て来ゆる折の為体。馬助が故朋輩某甲を投殺ゐと。餅九郎が偷見て豊俊が裏伐の内応の詭譎ろ以照据をゐられば其使馬助ぞ。男女三名と同船ゐく。かつ来ふけ由と事の首尾を。詳に報しべ憲儀點頭うち欽びく。隨即音音曳ると。友勝妙真單節ぞと都て船より召登して。みづから又其来意を尋る時降人の作

法られべとそ。晋六則友勝に両刀を帯ることを饒さぞ。徒而友勝がら所餅九郎が報ゐと毫も差違とあるぞ。友勝は千代丸豊俊が舊臣濱縣馬助と偽名告て。則豊俊が裏伐の諜状書を呈れば。妙真は馬助の母戸山單節は馬助の女弟叫子音音は樋口曳ゐは臥間と各名を変て。倶に憲儀に拜謁を登時大石憲儀は件の諜書をうち開ひると見て。畏て懐に夾めそらぞ。豊俊裏伐の情願は既に我間諜児天品山餅九郎が見出あて相違あるぞとふ上は今ゆく疑ふべもあるぞ。水戰は大後日と定やる。其折殘黨獄を破りて豊俊を救出して俱に東伐し里見の艦を焼くべ。あの故に馬助ぞ宅眷を安房に在ずとそ。ゐく参らせて。極く好戸山叫子臥間とやらン。三個の女子は保質にして城内へ召措ん但し御方の士卒は豊俊を認りる者あるべ樋口と呼ンぞ其嫗を武佐に管けて。艦に留て豊俊が

文溪堂蔵

女流を留め
憲儀豊俊の諜書を受く
明相清英怪事を信有り
生拘
ぎふた
ぎふた
ちんた
のりこ
のりこ
ひくと
おとる
のりこ

ともひと
ともひと
のぶより
あけちひ
ひとよ
ぬまち
友ろう

来ぬる折の眼児ゐせよ。又濱縣馬助ハ悄地よ安房へ立かへりく。殘黨並ゐ故主
豊俊ゐ報て裏伐の准備をいそがね。我ハ徑ゐ五十子へ退りく言上ゐ及ぶべ。ちろ
ゐる狡と宣示ず大家ひらく美額御く。開ぐ中ゐ友勝ハ唯々とだうゐ言美
ず立まくも。當下仁田山晋六も。一旦没官る友勝ゞ両刀を卒とそ返せゞ友
勝ハ受戴ゐく腰ゐ帯びて。妙真音曳ゐ單節ゐ目を注ーちゐる。そて却
憲儀ゐ拜謝ーゐ且晋六と餅九郎ゐ別を告く退ぐく。船ゐも乗り艪を推
建て安房と投て漕去りけ。介程ゐ大石憲儀ハ天品餅九郎ゐ分付て。妙
真の戸山曳ゐの臥間單節の叫子二個の婦女子と。開ゞ儘ゐ推立ーて。倶ーて五
十子の城ゐかへりぬ。隨即主君定正ゐ千代丸豊俊ゞ裏伐の諜状と言上ゐ。
且曩ゐ安房へ遣る間諜児天品餅九郎ゞ倶ーて来ゐけ。豊俊の密使濱
縣馬助と。老弱四個の女子のるゝと。顛末送るく。ゆゑ上ゞ定正ハ其書を閲ー。

其言を受く。欽びゐ堪ず合笑れる額と拊て。憲儀ゐ向ぐ。往る日没ゆ。ちゐん。
那風外道人ゞ遥ゐ安房の方と見出て。洲崎ゐ隱々くる黒氣ゐ異日
那里ゐ内応の者あんとゝ。先見果ーて違いず。今料らずーて。千代丸圖書助
豊俊ゞ内応の吉事ゐ。別又赤品百中。武田信隆の便宜を図るゐ。皆是自
家の洪福。今番の征伐必勝。何の疑ひあるぞや。件の戸山臥間叫子と
ゐ女子毎と。保質ゐ捕置ゐ。開き其田馭蘭二ゐ管けて。是ゆゑの下知を
へよと。詞委るく分れる。面色ゐ快然ゐ。憲儀これを美りく。御諜の如く這
回の吉兆第一義ハ風外道人の風術ゐ。ハゞ臣ゐ明日。谷山ゐ赴ゆく。ゆゑ八日ゐ
閉戦の折。約束を違ぎーて。那風を吹もだるゝ。憑ゐ又保質の女子と
事ハ馭蘭二ゐ御諜を伝へて。伝とうち守ゐ。ゆゑ。相あるべゐ。と応て。躰て退ぐ。
却其田馭蘭二ゐ件の下知を伝示ーて。倶ーる妙真曳ゐ單節を。開ゞ伝遞

與して又必ず。他等ハ皆女流なれども千代丸豊俊が保質なれバ日夜の守を固くもべし。其番卒の頭人にハ。家臣朝時技太郎と天岳餅九郎を附置ん。和殿も折々由断なく。宜く心を屬てよと諭せバ。馭蘭二謹て則件の三個の婦人を乾淨なる一室に在らせて。恣に外ざまへ出ることを許さず。技太郎と餅九郎ハ。その勤番の頭人なれバ。五六個の雜兵を従へて。迭代りにうち守りて居り。然ば地に跂ふ虫水に住む魚も。雌雄の嫐合ざるハあらぬに。這餅九郎と技太郎ハ。年三四十に至るまで尚獨寝にて妻なければ。曳手單節が年少くて且愛々しき面影の羈鞹と做て暇あれバ。勤番に倦ず厭ず。現野の花ハ目に艶く。村酒の人を醉する心地さへして。堪ざりけれバ傷に人のなき折に。餅九郎ハ悄々地に技太郎と商量するやう我意に那呌子ハ千代丸の殘黨濱縣馬助の女弟なりと。すぐ良人なしといへど。是も入ぞの年増女。又那臥間ハ良人ありしに甲裏に戰敗れし時

陣歿しつといふなれバ。今ハ何でもなき早婺家也。然バあれ甲も乙も。寤寐不娯なる心底意あらん。郎欲しく思ふべし。我も亦美婦欲得と。久く求れども。得ざる嫐なれバ。今番の恩賞に叫子まれ臥間まれ相公に乞まつりて。娶まく思へども勝軍先後なりては。その議を稟まをしつべくもあらず既に這意ありながら守りてのミ旦暮見恰も画る餅を見て饑を忍ぶに異ならず。然れバ先那戸山に告て媒妁をしく誘へて後に乞稟さんと思ふハ甚麼と悄語けバ技太郎ハ笑を向て此の頤に手を覺ず。うち頷きて答るやう。然なり咱等も亦其意あり。畧裏中に我も間諜の役也。姑且安房に在りし時箇様々々の不造化也。一旦擒捕られしかども饒されてかへり來ぬ。里見殿の心操と那里の虛実を大爺に報稟まをしくべ小功ありつれバ。その和主と共侶に那嫋一個を乞まつらんにその事を戸山の媼に告て。先その縁しを結び置くべし。迭に樂しからぬべし。和主ハ臥間欲叫子欲。

と問ふを餅九郎ものもぢ開かの問ふくまでもあるぞ入ぐ呼子ふせん。戸山の媼
ぬの我情願と和主告て誘へよ和主の意中わ我告んと示し合せつ人ゐ折ふ。
迭代ふ妙真を悄地ふ招ぎて云云と似げるに面の皮厚うまく。其情慾を打
出ぎて媒妁ふそ譚へば。妙真の呆果て。烏滸人ゐりと思へども昼立ゐぞ必
怨ぐ。万事せん欲と強顔くゐせぞ陽ゐ然ゐ面色ゐ。成ると就らざる間りて。
術よく延を空言ぐうちも惜れぞ曳ゐ単節ふ箇様々々と其に告ぐ。腹立
あくいあるべけれども大阪主の逆ゐ謀りゆひい這頭ふんべゐむ。然ゐゐも赤物怪の
幸ふゐゐよーのゐゐぐぞ色ゆゐ出ーのゆひそと解ゐ諭せぞ曳ゐ単節ゐ。ゐゐ伝らと
応ぐも沼堪ゆゐよ立ち腹を横日刺を臆推開て。天を瞻る物思ひ憂い那
里ゐ異ゐ夏憂ふ就ても男姑と兒子の上ゐ左ふ右ふ心よかゐ胸の雲雪い稀ゐ
ゐ冬の日を秋ゐとぞ思ふ露ふ玉ふ濡ゐい神の涙え不題。ゐの日洲崎ゐ里見の

陣所ゐ遠見の為ふ隊兵を領て。其頭の浦巡りを致ゐ一両個の小兵頭印東
小六明相（東六郎辰清瀧ら）荒川太郎一郎清英（清瀧ら子ゐ）ゐ三個の鑑瓜児を搦捕て本
陣へ牽ゐて来ゐ。倶ふ訟禀ゐ来ゐ臣ゐ方僅這浦續ゐる馬頭上ゐ。這三
個の鑑瓜児を生拘ゐ。来歴出処を責ゐ問ひ。他ゐい素藤と同悪ゐ。
是裏ふ廳南の城を没落ゐる武田左京亮信隆の使ゐ。當御陣へ参る者ゐ
といへり。ゐゐ。ゐゐぐゐいへども敢是を恣ふせぞ。憲断を請ゐるとふ是ふゐ義成
主ゐ端近く出ぐ。其生拘ゐを実撿ゐ。則軍師大阪毛野奉りて其言れ
虚実を鞠問ゐ。犬山道節ゐ明相清英の隊長ゐれ。倶ふ這詮議ふ與り
けり。然ゐゐの生拘三名の内ふ武田信隆ゐ猶子ゐ。一條端四郎信有と喚做
ゐ一個の壮佼ゐ。ゐの者則陳ゐ。小可ゐ。今一番信隆の密出使ふ立ち
ぎゐ。推て御陣へ参りーゐ。則是別義ふいぞ量裏ゐい信隆諜ゐ。草蜜田素

藤と親しかりけ。交遊の罪脱るゝを路るゝ。竟ゝ御敵とるゝ。より脱くも勢ひ窮るゝ。一二の殘黨と共侶ゝ乱戰の中ゝ命を免まゝ。甲斐國へ赴ゝ國主武田信昌ゝ親族ゝ身を寓ゝ。今まで那里ゝ扇谷より。信昌ゝ加勢の軍兵を催促せゝ。信隆是ゝ時を汐ゝ。請ゝて信昌の代軍として。隊兵繞ゝ三百餘名を領ゝ。鄙ゝ五十子の城ゝ到る。然べ其志陽ゝ扇谷の從軍ゝへども。先非を悔ゝ。當家の仁義を景慕の臆念既ゝ久し。いで舊罪を恩赦あゝ。異日閑戰の時ゝ臨ゝ。信隆必裏代してゝ大功を奏まべし。其忠其功あるゝ於ては。舊ゝ因ゝ。廳南の城を返し賜へか。情願只今御許容あゝ。免許の御書を賜りて。異日の證文ゝ做まゝ欲も。言偽りゝ為ゝ侄ゝ。一條信有を。保質ゝ召措せゝ。ゝの義信隆ゝ。ゝまゝ五十子の城ゝ入られゝ以前。路ゝて悄地ゝ小可ゝ使を課せゝ。信隆ゝ呈書ゝ秘して

小可ゝ衣襟の裏ゝ在り。今ゝ出し。中内さゝ相違あるべゝ。とゝ。義成是をゝ。隨即明相ゝ分付て。其信隆の呈書と合ゝ出させて。毛野ゝ讀せゝ。其文今信有ゝ趣と。聊も違ふとゝ。尾ゝ數ゝる。抜言文ゝ血を沃ゝ。赤心を見し。義成是を听果て。毛野と道節を見ゝ。汝ゝ義を何と思ゝ。暴裏ゝ武田信隆ゝ。蚤田素藤と交りし人を知ゝ。衍心れども。畢竟義俠の本性れゝ勝ゝと知りつゝ。一旦逆徒ゝ與せしを。今ゝ悔し。思ゝ。ゝて保質を。寄せて欺ゝ。誠心を示し。怎麽許さん。狡許さまゝ。狡試ゝ是を試せよと。問れゝ道節亮も。疑試ゝ。御諚ゝ恐れゝ。御仁心の至りゝ。へども。今の世の人心。拙言盟ゝ背ゝ。保質を。無ゝ。敵を謀ゝ者。間是ゝ。況や甲斐の武田ゝ。甘利竜元るゝ。智謀の老黨ゝ知る。所へ傳聞をゝ。畢ゝ

わゝぞ。然ば信隆ゞ降参ゝ保質をとりくゝまれべとも。再議ゝ及ばで恩免ら。物体るくやいんと。議さるを義成うち咍て。毛野ゞ意見を問めべ。然ンいゝ。道節ゞ小心ゝ量る所穏當ゆ。危ゝゝゞいへども。豊後の笑もいゝ。今信隆の帰降の願ひを。疑ふく許ゆゝゞへ。御仁政ゝ異同あゝく。後ゝ是をゝゝ者もいべ。縦今。赦免の御書を賜ゝく。信隆実ゝ帰服せゞ。悄地ゝ謀るゝあり。とも。扇谷の士卒那意を悟らゝく。御書あゝゝとのゝ知ゝべ。反ゝく信隆を疑ふべ。然ば是做さゞゝて。反間の計。約ゝるゝともいゝ。孰の方ゝも御方ゝ益あり。使ゝ御書を賜ゝく。信有をのゝ保質ゝ留めゝく且信隆の意志の虚実を。商ゝるゝ若とやいべ。と答稟せば。道節も悟りて。獨點頭くのゝ義成遂ゝ。ゝの議ゝ任ゝく。則赦書を両個の使ゝ取せく返ゝ遣ゝ。信有をのゝ。稲村ゝ原清澄ゝ預けゆひけり。